

第3回大分市奨学資金制度検討委員会 議事要約

日 時：令和5年10月17日（火）
10時00分～11時55分
場 所：第2庁舎6階 教育委員室
出席者：検討委員会委員11名
学校教育課職員5名

1. 日 時 令和5年10月17日（火）10：00～11：55
2. 場 所 第2庁舎6階 教育委員室
3. 出席者

○検討委員会委員

委員長	長谷川 祐介
副委員長	能美 知子
委 員	杉本 緑
委 員	得丸 直子
委 員	穴井 壯志
委 員	江藤 陽二
委 員	児玉 洋司
委 員	植木 龍典
委 員	斉藤 修造
委 員	三好 正昭
委 員	高田 隆秀

○事務局

学校教育課長	江隈 英明
学校教育課参事	平田 敬二
学校教育課参事補	高橋 知美
学校教育課主査	高治 祥子
学校教育課主事	若林 遼

4. 欠席者

○検討委員会委員

委 員	和田 純一
-----	-------

5. 次 第

- 1 開会
- 2 協議
新制度の具体的検討
- 3 閉会

議事要約

1 在籍出向について

- ・在籍出向について、市内の事業所を通して、大分市の経済活動に寄与しているというみなし方もできると思う。在籍出向者も大分市の事業所に勤務として認めていくのも一つの考え方。
- ・大分で活躍したいという思いをもって応募してきているので、その思いは市としても大切にしていきたい。大分市に本社がある事業所で就職したということを考えれば、結果的に大分市に貢献するといったことも含まれてくる。
- ・もともとは返還免除というところを想定している制度と理解しているので、できるだけ認めていけるような制度設計をすすめていけるといいのではないか。
- ・返還免除要件の5年間大分市内の事業所に就業というところについて、在籍出向者（大分市内の事業所に籍を置いているが、市外・県外の会社に出向している人）の扱いはどうなるか。また、猶予期間に含めるのか含めないのか。細かいルールがあった方がいい。
- ・在籍出向者について検討する方が、事業所側としてはいいと思う。
- ・当然志をもって大分市に勤務したのであれば、何とか免除していただければありがたいという気持ちがある。
- ・一定のルールを定めて、個々の状況に応じて判断するのはできるのではないか。できるだけ奨学金を借りた人、大分の会社に就職する人、大分本社の会社に就職したというような人達にとって、その枠は広くとってあげるような仕組みを整備していけばよいのではと思う。

2 大学院について

- ・大学というと、日本でいえば学部卒が多いが、国際的にみると修士課程、博士課程までが多い。博士課程は5年間かかる場合もあるので、予算的などころもあると思うが、現実的などころで考えると修士課程ぐらいまでは検討してもよいのではないか。
- ・高度な教育を受けた人材を確保していくという観点で考えたら、大学院進学についてもサポートしていくという考えもある。
- ・大学院に進学する人の奨学生の選考については課題があると思う。
- ・スペシャリストを育成するなど、修士課程まで行くというのは大きな流れだと思う。
- ・（貸与を）プラス2年というのが出来たら、すごく伸びしろが確保できるというのは指摘の通りだと思う。ただ予算を確保しつづけるのは大変なのではとも思う。
- ・大学院に進学して奨学金を適用するかどうかの判断をどのようにするか、高校から大学に進学するときよりも判断が難しい。
- ・最終学歴までは、返還の猶予期間に含めない、（猶予期間のカウントを）スタートさせないという形にするのがよいのではないかと思う。予算があるのであればいろいろ

ろ柔軟にできたらいい。

- ・大学院の貸与を検討する場合は、対象者を誰にするかも検討する必要がある。大学進学の際には奨学金をもらわずに進学して、大学院に進学する際に必要になったような人も、外部からの追加募集みたいな形で応募できるようなシステムなのか、この奨学金を受けて院に行く方だけを奨学金で援助するという発想なのか。
- ・中学校の教育現場でも大学院を卒業した先生が増えている。予算の問題だと思うが、4年間プラス大学院の2年間での貸与という検討ではなくて、6年間を一つのパッケージとしてやれたらどうか。（申請者が奨学金の貸与について）4年間の在学期間だけでよいとなれば2年間は貸与しなければいい。
- ・大学4年制に進学した後に、専門性を高めようと2年間追加で進学しようとなった場合に奨学金を貸与することを検討できないか。福祉を目指す人はそういう設計をする人が多い。
- ・二段階の整理があると思う。修士課程も医学部歯学部のように貸与するという整理と、猶予期間についての整理。
- ・資格をとるためには追加で大学院に行かないと取れないというものもあるので、予算を確保して貸与で対応するか、貸与できないとしても猶予期間から外してカウントするのかという整理は出来ると思う。

3 留年・留学・休学等

【事務局としては留年したら打ち切りということで検討している話を受けて。】

- ・休学して自発的に休んで留学するケースと、健康上の理由で休学するケースの区別をするのは難しいので、健康上の理由をある程度配慮するとなれば、休んでいる間は奨学金を貸与せず、復学したら貸与するという形で問題ないと思う。
- ・自ら留年するのが分かっているケースについては、個人の意見としては認めなくてよい（打ち切り）と思う。大学進学する際に教育課程のような形でアドミッションポリシーやカリキュラムポリシーで情報が公開されているため。
- ・健康上の理由については休学等をうまく使いながらというのが実際かと思う。
- ・半年間や、1年間留年したというのは自己責任も大きいので特段配慮しなくていいのではないか。
- ・募集要項で、こういう場合は奨学金が出る、出ないというのは明示していく必要がある。
- ・通常予定される年限で4年、医学部であれば6年の期間で学習・卒業してくださいという市のパッケージで十分では。細分化すると難しいところもあるので、市としてはこのパッケージで十分手厚いかなと思う。
- ・修士課程も含めて6年間というスパンで考えていく中には、ちゃんと頑張っって修士課程に行く人もいるし、休学して別のことをする人もいるし、サボって留年する人もいるし、それをどうやって仕分けしていくのかという整理をする必要がある。

4 他制度（国の制度等）との併用可について

- ・できれば併用可とした方がいいと思う。本来は家庭の状況に関係なく、ある程度、いろいろな活動ができるということが望ましいと思う。
- ・ある程度優秀で意欲的な学生が、いろんな形で（奨学金を）併用してお金を借りたり給付されたりするのは、力があって意欲があるからで、そのお金を大切に使いながらいろんな活動できることはむしろ望ましい。
- ・高校現場で、少し（家庭状況が）厳しいご家庭の生徒さんに奨学金をあげたいという気持ちが働くのは理解できるところなので、どういった形でセクションしていくのかしっかり詰めていく必要がある。
- ・基本的にこの奨学金は所得要件をあまり考えないタイプと考えると、複数の奨学金を受給し得ること自体を何か不利に考慮することと関係があるか、若干難しいところがあると思う。
- ・併用可について、大分大学の医学部等であれば、地域枠というのもある。地域枠で進学しながら、この大分市の奨学金ももらえるとなった場合にかなりの金額になる。こうしたことを考えると公平性の部分でどうかと思う部分がある。日本学生支援機構も教員の奨学金免除を検討していることから、併用可とするのも年次見直しした方がいいかと思う。
- ・併用可としたときに校内で選考する際に、どの奨学金制度を受給しているかを確認する必要はなくなるが、選考する基準を設けないと選ぶのが難しい。情報公開請求が行われることも考えながら選考基準を設けなければならない。
- ・大分市で併用可だったとしても、相手の制度が併用不可であれば併用できないので、一般的に併用可が普通であれば制度としては併用可でいいのではと思う。

5 応募資格、選考基準・選考方法について

- ・応募資格①「大分市内の高等学校等に在籍している者」について、市民がどのように思うかというところはまだ議論が必要だと思う。
- ・応募資格①「大分市内の高等学校等に在籍している者」について。市民ではなくても応募できることについてどうかと思う。応募資格②「保護者が大分市内に住所を有し、かつ市外・県外の高等学校等（広域通信制高校を含む）に在籍している者」については分かる。後々市民の方に意見をいただく機会はあると思うが、ちょっと気になるところ。
- ・応募資格の「新1年生」の表記について。応募資格で大学1年生という意味合いだと高校が関係なくなるため、「高校3年生」という表記がよいのではないか。

6 様式案について

- 【事務局としては、選考票の3項目「学業成績」「人物概評」「地元への貢献に対する意欲」の配点比率は、学校に任せるところを考えているという説明を行った。】
- ・最終的には地元への貢献ということが今回の奨学金制度の重要な柱となっていると

考える。例えば、すべて学校にランダムに比重を任せるのではなく、③「地元への貢献に対する意欲」については50点ぐらいにして、残りの50点となる①「学業成績」と②「人物概評」の配転比率については、学校に任せるなどもよいのではないかと思う。

- ・市教委側からのメッセージというか、こういった人が応募して欲しいという意味では多少踏み込んで、ある程度配点を決めておくという考えかと思った。
- ・②「人物概評」の項目の一つであるキャリア教育に関していえば、基礎的汎用的能力といったところで4つの資質能力であるとか、国の方で示されている2020年度からスタートしたキャリアパスポートといったところでも、それに応じたものがある。
- ・学校内の教育活動的なことを言えば、キャリア教育が比較的親和性が高いかと思う。そういった指標みたいなことを一つの例として示している。
- ・項目についてももう少し検討の必要がある。
- ・申込書のスペース的なところをもっとあってもいいと思う。(奨学金希望者が)ある程度書けるスペースがあるとよい。
- ・申込書案の「保護者からの意見」について。児童養護施設等に入っていて、保護者がいない場合の生徒についても考える必要がある。推薦者とかそういうふうにしなないといけないのではないかと思う。
- ・申込書案の「地元(大分)への貢献」について、大分県への貢献ではなく、大分市への貢献ということの意味しているのであれば大分市と修正した方がいいと思う。
- ・人物概評の点数化が難しいと思う。人を見る角度、観点によっても一人の生徒の評価はいろんな先生方からこんなに違うのかということも結構ある。そこをどのように客観的にするかというのが学校の課題と思う。
- ・③「地元への貢献に対する意欲」について配点を50点とするのは、一つのイメージ例としてわかりやすく、あってもいいかなと思う。学校側に、残りの部分でコーディネートできる部分を任せて欲しい。
- ・将来大分で活躍する人を作るための新しい奨学金制度ということを考えれば、地元大分への貢献についての比重が高い方がいいと思う。仮に比重を市教委側から示さず学校にすべての項目を任せるということであれば、少なくとも地元への貢献意識の部分を最初に聞くべきではないか。順番だけでも工夫した方が、新しい奨学金制度の特色が出るという意味でも表現できると思う。

7 その他

- ・WEB 活用的なところは、どこかのタイミングで避けては通れないと思うが、それが作業的に煩雑になることが考えられたり、システム構築にコストがかかり予算面で奨学金の貸与の予算が削られたりすると、本末転倒かと思う。
- ・申請方法について基本的には原案に賛成。今後の検討項目としてWEB活用してはどうか。イメージとしてはエントリー者がまず主催である大分市教育委員会にエント

リーして、教育委員会はとりまとめてそれを各学校に情報提供する。提供を受けた学校は選考を実施するというような流れ。教育委員会は受付段階でエントリー状況を把握できるメリットがあり、今後仮に追跡調査等を行う場合に分析がしやすくなると考えられる。

- ・チラシ等で高校入学時から定期的に知らせがあると、リマインド的なところでいいと思う。高校1年生のタイミングで制度の骨組みのお知らせ、高校2年生のタイミングで同じようなお知らせ、高校3年生のタイミングで詳細なものというのがあるとよい。

【検討課題】

在籍出向について

大学院進学者の奨学金貸与・猶予期間のカウントについて

留年・留学・休学の際の奨学金の取扱いについて

他制度との併用可について

選考基準・選考方法について

申込書案・推薦者選考票案について